

## エピローグ

## わが国の混迷と閉塞打開への発端 ― 大学の荒廃と再生

今、大阪大学理事会は、劣悪な差別的労働条件の下で、長年の間、懸命に研究・教育に携わってきた非常勤講師を、突如、「公募」というまやかしの手口を弄して、二〇二三年三月末で大量に雇い止めにしようとしている。これはもとより、「無期労働契約への転換権」を定めた労働契約法第一八条違反の行為であり、人間をまるで機械部品のように使い捨てにして恥じない無慈悲、かつ人権蹂躪の悪辣きわまりない行為である。しかも、これを研究・教育の府であるべき大学において、平然と強行しようとしているのである。

周知のようにわが国においては、小泉政権（二〇〇一～〇六年）以来、悪名高い新自由主義のもと、非正規社員が急速に拡大、今や雇用労働者の四〇パーセントにも達し、さらに増加の一途を辿っている。今日の国民の生活苦、社会不安の根底には、この歴史的構造的矛盾が抜き難く横たわっている。

本来、研究・教育の府である大学は、こうした状況にいち早く警告を発し、防波堤の役割を果たすべき立場にありながら、それどころか自ら権力に唯々諾々と追従し、しかも率先してその片棒を担ぐ始末である。人間の尊厳に関わる人権すら平然と踏みにじり恥じない大学に、果たして今後、何ができると言うのであるか。同様の将来不安の中で今、悩み苦しむ多くの若き学生・院生たちに、大学は己の非を一体、何と説明するのであるか。大学はどこまで墮落すれば気が済むのであるか。誠に残念である。

表には見えない大学のこの荒んだ実態を、一人でも多くの市民のみなさんに知っていただきたいと思う。この非常勤講師大量雇い止め問題は、決して大学だけに限られた小さな問題ではない。全国各地の小中高

校においても非正規教員がますます増大し、深刻化している。本シリーズでも縷々述べてきたように、これは、わが国社会の構造的矛盾、社会の腐敗に起因するきわめて深刻で重大な根源的問題なのである。

旧統一教会と歴代自民党政権との根深い因縁と政治腐敗。さらには、隣邦諸国からの侵攻の危機を煽り、恐怖心と敵愾心を掻き立てつつ、「国民のいのちと暮らしを守る」などと嘯き、呪文の如く繰り返し唱えながら世論を誘導し、果てには大学にまで触手を伸ばし、軍事研究へと動員する。日本国憲法の根本精神をすっかり忘れ去り、「軍拡増税」「軍拡国債」、果てには「別途公金」の活用などとわめき立て、軍備拡張へと邁進する昨今の異常さは、さながら戦争前夜の観すらする。

これら諸々のことを合わせ考える時、今日のわが国の事態は、もはや放置できないギリギリのところまで来ていることに気づくはずである。

非常勤講師大量雇い止めのこの問題も、大阪大学理事会幹部の卑劣を糾弾すべきはもとより、この際、大学人としての最低限の矜持すら忘れ、それを許してきた大学全構成員自身も、自らの問題として深く受け止め、真剣に考えなければならぬ時に来ているのではないか。

国公立大学の法人化以降、大学の自治は、知らず知らずのうちに根底から見事に切り崩されていった。今や大学は、国家権力に奉仕する下僕しもべに成り果て、大学の自治は、市民のみならず、大学の内部においてすら、すっかり死語となってしまった。ますます目先の成果に追い回され、自由で澁刺とした研究は、圧殺されていく。これでは国民から信頼されるどころか、自由で創造的な研究・教育の発展は望むべくもない。

こうした昨今の大学の荒んだ状況にあつて、私たちは、二一世紀の今日にふさわしい理念に基づく新たな大学の再建に、ゼロからスタートする覚悟で臨まなければならない。

学生・院生の学習・研究条件、常勤・非常勤を問わず、大学で働く研究者・教員および職員という大学全構成員の労働条件、福利厚生、そして大学本来の社会的役割である自由な研究・教育の発展を保障する不可

欠の絶対的条件は、大学の自治の確立である。これら諸々の全一体的な発展を支えるに必要不可欠な存在こそ、まさしく常勤・非常勤を問わず、大学で働くすべての構成員によって自主的・主体的に組織される、新たな理念に基づく教職員組合の存在であり、それをめざすゼロからの再建なのである。

わが国は、先進諸国の中でも労働組合の組織率が際立って低い上に、職場でもっとも弱い立場に置かれている非正規労働者が実質上、排除されているなど、労働組合としての本来の役割を果たしているとは言い難い、いわば名ばかりの組合がほとんどである。わが国最大の労働組合のナショナルセンターと言われている連合もその例外ではなく、御用組合と言われていることは、周知の事実である。

こうした状況の中で、今や雇用労働者の四〇%をも占めるに至った非正規労働者は、分断と孤立を余儀なくされ、将来不安に怯え、さまざまな事情や理由から声を上げることすらできず、個々バラバラに放置されたまま、悩みを抱え込み苦しんでいる。その圧倒的多数にとつては、憲法第二八条「勤労者の団結する権利及び団体交渉その他の団体行動をする権利は、これを保障する」の条文は、もはや空文と化し、実質上、無権利、無法の状態に閉じ込められてしまったのである。

人道に反するこうした差別的な非正規労働の強制と、国民の生活と生命を根底から破壊する「軍拡増税」の卑劣な企み。この二つの強権的大罪に限ってでも、異議を申し立てる一大国民運動が全国各地で湧き起こっても不思議ではない、そんな時に来ているのではないか。

大学における教職員組合の再建は、戦後長きにわたって後退に後退を重ねてきた、こうしたわが国の労働運動と国民運動全般における低迷の末の厳しい現実からの出発なのである。その困難は並大抵なことではないが、そこからの出発なくして、大学の将来はないと言っても過言ではないであろう。

今日直面している大阪大学の非常勤講師雇い止め問題も、何よりもまずこうした現実の困難をしかと自覚し、長期展望のもとに一步一步、解決していくことから始めなければならない。

それは、本シリーズ『二一世紀の未来社会』の第六章3節の項目「労働運動に『菜園家族』の新しい風を――二一世紀の労働運動と私たち自身のライフスタイル」でも詳述したが、これまでの労働運動の負の遺産を背負いつつも、より高次の労働運動、国民的運動をめざす次代の画期的な民衆運動創造の過程で、はじめて新たな展望が開かれていく、そんな壮大な課題でもあるのだ。問題は、その目標に向かって、大学の広範な構成員のエネルギの結集によって、今日のこの時点からどう準備していくかである。

その解答とも言うべきものは、そうたやすく得られるものではないが、人間の社会的生存形態から説き起こし、近代を超越するおおらかな自然循環型共生社会（じんん社会）の構築、すなわち生命系の未来社会論具現化の道を包括的に提起した本シリーズの中に、多少なりとも手掛かりを見出すことができれば幸いである。

そして何よりも、この提起をめぐって、まずは大学内から先鞭をつけ、同じ問題を抱えている保育所・幼稚園、小中学校、図書館、医療・介護・福祉等々さまざまな「職場」、さらには全国津々浦々の「地域」における生産と暮らしの現場で、主体的に、広く熱き、だが冷徹な議論がはじまることを願っている。大阪大学の今日のこの事態とその行方は、日本社会の現実と未来を映し出す鏡そのものである。

#### 夜明けの歌

生あらばいつの日か  
長い長い夜であった  
星の見にくい夜ばかりであった、と  
言い交わしうる日もあるうか：

一九四五年一月二九日、友への手紙にこう綴ったわだつみの若き学徒松原成信（近江八幡市出身）は、  
一縷の望みを胸に灯しつつ、同年八月一日北京にて人知れず戦病死した。享年二三歳。あまりにも短い生涯であった。<sup>\*1</sup>

戦後さまざまな苦難の曲折を経ながらも

それでもなお国民が追求してやまなかつたもの

それは、戦争の惨禍から学び獲得した

「平和主義」、「基本的人権（生存権を含む）の尊重」、「主権在民」の

三原則に貫かれた

世界に誇る

日本国憲法の理念を遵守する精神ではなかったのか。

戦後七七年を経た今日においても

なおもこの遵守の精神が

たとえ僅かであつても

人々の心のどこかに生き続けている限り

それは、あたかも自然界の

大空と大地をめぐる水の循環の如く

その一滴一滴が地層深く浸透し、地下水脈となり

いつしか地表に湧水となってあらわれ

大地を潤していく。

燦々と降り注ぐ  
太陽の光をいっぱい浴び  
豊かな土と水に  
ゆつくりと育まれた植物は  
やがて実を結び  
生きとし生けるもの  
すべての喜びを祝福する  
大きなエネルギーに転換される。  
私たちが同じであろう。  
先を焦らず  
ゆつくり、しかも時間をかけて  
地力を養い蓄積された  
いのちのエネルギーは  
醜い欺瞞と反動の闇夜を引き裂き  
根源から時代を問い直す  
新生「菜園家族」日本の幕開けを告げる黎明となる。  
この夢は、せめて人々の心の中に  
いつまでも生き続けてほしい。  
いや、それどころではない。  
この夢こそが

この国の  
そして東アジアと  
世界のすべての人々に  
勇気と希望を  
生きる喜びを  
いつまでも与え続けていくであろう。  
この小さな  
幸せ祈る  
私たちの心を  
きつと  
おぼえておいておくれ  
地平を開く  
夜明けの歌よ。

※1 日本戦没学生記念会 編『新版 きけ わだつみのこえー日本戦没学生の手記』（岩波文庫、一九九五年）より。